



第七章

鉾山の暮らしと文化

鉾山特有の町並み



JR 生野駅西口

生野瓦 [生野]

生野の寒冷な気候に耐えられるように、普通の瓦より硬く焼いた瓦で、カラミ石と同様に生野特有の景観を造り出しています。通称「赤瓦」とも呼ばれ、赤褐色の独特の風合は、レトロな町をいっそう際立たせます。新設されたJR生野駅西口や、平成22年度に復元工事が行われた「旧生野鉾山職員宿舎」の一部には復元された生野瓦が使われています。

カラミ石 [生野]

銅などを製錬する時にできたカスを固めたもので、鉾滓(こうさい)といわれています。地元では「カラミ石」と呼んでいます。生野鉾山周辺の家の土台や堀、水路、公園のベンチなどで使用されています。各辺数10cmの直方体に成形されたカラミ石は、重さ約100kgにも及びます。口銀谷地区の但馬口番所跡近くにはカラミ石の井戸があります。



マンホール [生野]

生野の町を散策する際には、足下にも気を配って歩いてみましょう。マンホールには、旧生野町時代の町木「ドウダンツツジ」、同じく町花「リンドウ」、観光名所「魚ヶ滝」、そして史跡生野鉾山の「金香瀬抗口」がデザインされています。



菊の御紋 [生野]

明治9年(1876)に完成した生野鉾山新工場の正門は、昭和52年、シルバー生野(史跡生野鉾山)に移転して保存されています。大小2組の門柱で、大柱は幅・奥行ともに1m、高さは4.6mあって、メートル法で作られています。コワニエによる設計で、明治政府の所有を示す「菊の御紋」が入っています。鉾石の道エリアには、他にも官宮や皇室財産であったことを示す「菊の御紋」の入った施設が残っています。

鉾山施設



トロッコ軌道跡 [生野]

生野の町を走っていた馬車鉄道を廃止して、大正9年(1920)に電車軌道として完成しました。市川にアーチ形に石垣を積んで、川に張り出して線路を確保。今もその美しい姿を見ることができます。当時は生野鉾山本部から生野旧駅までを、アメリカ製の6トン電気機関車が走る500ミリ軌道で結びました。現在、軌道の残る遊歩道として整備しています。

明延鉾山住宅

[明延]

昭和11年(1936)頃に建設された北星社宅は現在も4棟が残っており、通称「長屋」と呼ばれています。4つの鉾山全てにこうした社宅群が建てられました。明延では7地区に次々と社宅が建設され、昭和29年頃からは最新鋭の住宅としてプレコン2階建、3階建の住宅が建ちました。北星社宅の景観は、国内でも他の地域に残っていない貴重なものです。



現在の旧北星社宅



鉾山臼 [中瀬]

鉾山臼は16世紀後半から江戸時代に鉾石の紛成作業(細かな粉にすること)に使用されたもので、主に金山で使用されることから金山臼とも呼ばれます。全国の鉾山の中でも使用が限られる珍しい道具ですが、中瀬鉾山では約100点が確認されており、全国有数の金山として栄えたことを示しています。注意しながら集落を散策すると、石垣や庭石などの中に石臼を見つけることができます。



いわっ
岩津ねぎ **【生野】**

岩津ねぎは、江戸時代に生野銀山の役人が京都からネギの種子を持ち帰り、鉱山従事者の冬の生鮮野菜として栽培を始めたことがきっかけといわれています。現在では、博多の「万能ねぎ」、群馬の「下仁田ねぎ」と並ぶ日本有数の名物ねぎとして、その名が知られています。朝来市の冬の特産品(11月下旬～3月上旬)として、市内の道の駅、国道312号沿いの直売所などで販売しています。

鉱山町のお祭り



生野踊り(盆踊り) **【生野】**

生野踊りは京都から移住してきた山師(江戸時代の鉱山経営者)が、盂蘭盆会の際の娯楽として、また、鉱山で亡くなった人への供養の盆踊りとして、都から踊りの師匠を招いて振り付けさせたことが始まりといわれています。「尺八」「三味線」「太鼓」「くどき」で構成されている行列踊りで、明治時代にはこれらの鳴り物の他に、「鐘」「小鼓」が加わっていました。

鉱山の風習



山神社(山神さん)

日本の鉱山には山で働く人々の安全と発展を祈願して、山の神が祀られています。4つの鉱山も同様で、鉱山の神様である愛媛県の大三島に鎮座する大山祇神社より分霊をいただき、山神社の社殿が建設されて御神体が安置されました。人々は「山神(さんじん)さん」と親しみを込め、毎年、春の大祭には鉱山も休業となって「山神祭」が開かれ、立派な神輿が町内を練り歩きました。また、各坑口の上部にも山神さんが祀られています。

史跡生野銀山
観光坑道入り口



レトルトには昭和30年代と昭和40年代の2種類ある

※店舗によって異なります
(写真:ロクログ)



ハイカラな食文化

ハヤシライス **【生野】**

生野鉱山が最盛期を迎えていた昭和30～40年代、都会から転勤してきた鉱山職員の社宅にはハイカラなものがたくさんありました。ハヤシライスもそのひとつで、洋食が珍しかった当時、生野の子どもたちにとって赤褐色の食べ物は強く印象に残ったといえます。現在、復刻ハヤシライスの提供店が点在しており、当時の味をベースにした各店オリジナルの味が楽しめます。また、お土産用にレトルトパックも販売されています。

明神電車 **【明延】**

鉱山で掘り出された鉱石は、明治43年(1910)から牛車や馬車で山を越えて運ばれ、大正元年(1912)からは全長5,750mの空中索道で神子畑に搬送されていました。そして鉱山の近代化とともに昭和4年(1929)に明延-神子畑間の随道が完成し、鉄道での輸送が開始されました。



明延探検坑道出口には、鉱石運搬に使われた機関車と鉱車が展示されています。実際の鉱石運搬にはこの鉱車が30両連結されて鉱石を輸送していました。

明盛共同浴場(第一浴場) **【明延】**

国の近代化産業遺産にも認定されている「明盛共同浴場(第一浴場)」跡。かつては6カ所も浴場がありました。「場」の文字が旧漢字なのも時代を感じさせます。鉱山生活者の共同浴場で、入浴料は無料でした。当時は芋の子を洗うような混雑ぶりだったそうです。現在は明延ミュージアム「第一浴場」として明延鉱山の鉱石や道具類を展示しています。



はぶち
羽淵鑄鉄橋
【神子畑】

神子畑鑄鉄橋と同じく、明治16年(1883)に始まった鉱石運搬用道路の建設時に作られた鑄鉄製二連の橋。「羽淵のめがね橋」とも呼ばれる、美しい洋式の橋です。平成7年(1995)に架橋時の姿に復元し、現在の場所へと移設されました。(兵庫県指定重要文化財)



坂ノ谷プレコン社宅

御雇外国人



コワニエ

鉱山技師兼鉱学教師として、明治元年にフランスから生野鉱山へ招聘されました。生野鉱山の調査や施設の近代化などに力を入れました。明治10年に数々の功績を残して後をムーセに託し、フランスへ帰国しました。



シスレイ

コワニエの妻の弟。生野から姫路飾磨港を結ぶ、日本で初めての高速産業道路「生野鉱山寮馬車道(銀の馬車道)」の工事総監督として尽力しました。



大島道太郎

岩手県盛岡出身。ドイツの鉱山学校へ留学し、日本各地の鉱山開発に従事した金属工学者。生野鉱山技師を務め、「生野鉱山鉱業改良意見書」を提出。生野鉱山鉱夫共済組合の設立にも関わりました。

朝倉盛明

本名は田中静吾で薩摩出身。イギリスとフランスに留学し、英語や鉱山学を学びました。コワニエの通訳をしながら生野鉱山の調査に関わり、宮内省御料局理事や生野支庁長などを務めました。



生野出身の三画伯

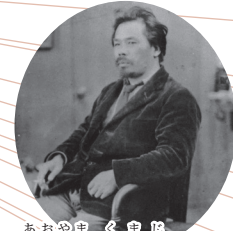
生野には鉱山の影響で日本各地から人や物の交流があり、最先端の文化や情報が入ってきました。日本の近代洋画壇を代表する3人の画家が生野で生まれています。



白瀧幾之助



和田三造



青山熊治

鉱石の道 ゆかりの 人物

ムーセ

コワニエの右腕ともいわれ、明治4年に技師として生野へ赴任しました。コワニエ帰国後は生野鉱山技師長となり、輝かしい功績を残しています。

レスカス

「生野鉱山寮馬車道」の設計や、異人館の設計監督を行いました。他方、愛知県明治村にある西郷従道邸や三菱倉庫などの設計も手がけています。



鉱山の技術者

勝部 郁男

一円電車「くろがね号」「白金号」の設計者。後に大手興産(現・三菱マテリアルテクノ)の社長となりました。くろがね号は昭和24年、白金号は昭和27年の完成。製作は明延鉱山工作課千子畑機械工場。

作家

立松 和平

生野、足尾で腕利きの鉱夫として活躍した曾祖父をモデルに小説『恩寵の谷』を執筆。

政治家

山田 顕義

長州藩出身で、明治の政治家。初代司法大臣、日本大学、國學院大学の創設者。生野義挙で自刃した親族の河上弥市(南八郎)を慰霊後、生野鉱山視察中に倒れて急逝しました。

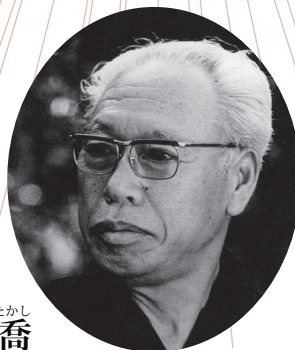
伊藤 博文

初代内閣総理大臣。明治9年の生野鉱山新工場落成式に、工部卿として同地を訪れています。

浅田 貞次郎

生野出身で衆議院議員として活躍し、播但鉄道建設や生野銀行設立に貢献。明治29年の鉱山民間払い下げの際には恩賜金の確保に尽力しました。

生野出身の俳優



志村 喬

日本映画史に残る名優。生野の自宅で生まれ、少年時代を過ごしました。名作『生きる』『七人の侍』など、黒澤明作品には欠かせない役者として活躍。そのいぶし銀の演技は、国内外から高い評価を得ています。昭和48年の帰郷の際には、生家の鉱山社宅にも訪れ、幼い頃の思い出を語りました。

鉱山の関係者

中江 種蔵

豊岡市出身で鉱山司として生野鉱山に赴任し、コワニエらと鉱山の開発に尽力しました。「中江済学会」という育英基金を創設しました。

広瀬 宰平

別子銅山総支配人、初代住友総理人。生野でコワニエより火薬を使った近代的採鉱法を習得。コワニエを招き、別子銅山の近代化を成し遂げました。

高島 北海

本名は高島得三。生野鉱山で学んだ経験から、日本初の独自で作成された地質図『山口県地質図』『山口県地質分色図』を制作しました。

和田 維四郎

日本最初の鉱業法典『鉱業条例』を制定。明治28年に宮内省御料局生野支庁長に任ぜられ、生野鉱山払い下げの件に携わりました。貴重な鉱物標本「和田コレクション」は、史跡生野銀山の生野鉱山文化ミュージアムで公開されています。